
瀬踏み小説

青匙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瀬踏み小説

【Nコード】

N4908K

【作者名】

青匙

【あらすじ】

積極的に文体を変えていこうという実験小説。200文字小説もこれからはこちらで投稿しようと思います。

2010/9/2に200文字小説を分けました。

紅頂く樹木（1000文字）

樹齡三百年を裕に越す桜木は、咲かせた淡紅色の花弁を風に遊ばせていた。

ゆらゆら、ゆらゆら。

新緑の地面に落ち、足下の彩りを鮮やかに染めるもの。気紛れに人を撫で、その上へ居座るもの。庭園の池へ身を投じて、その身を水面に漂わせるものもあった。

一色に煙る景色の中、一人の娘が枝を見上げている。その顔は、一年に一度与えられる甘美に魅了され陶醉した者のそれだ。

ほう、と娘が歎息を漏らした様子が、生まれた頃より桜と共に過ごしてきた私には、手に取るようにわかった。

曾祖父の代より以前から伝わる庭園。自然を模した日本庭園の一角所で、初見の娘は微動だにせずただただ桜に魅せられている。

もう大人の女性へと成長しつつある娘は、まるで幼子のようにあどけなく笑った。無邪気に白い歯を見せ、きらきらと輝いた目をしで。

「どうしたら、あのような見事な桜が育つのでしょうか」

娘の父にあたる男は、娘と桜とを見ながら私に言う。

「是非、御教授願いたいものです」

私は曖昧に微笑む。

壮年の男は毎年この庭を訪れる常連だった。最初に男が現れた時、男は先の常連に誘われてきただけの客だった。

たかが桜に何故大の大人が浮足立つのか理解出来なかっただろう。しかし男は一瞬にして桜に魅せられた。滞在中は一言も口にせず、帰り際呆けた様子から一変して興奮混じりに称賛の言葉を並べたて

た。年を重ねるにつれて、言葉は減った。

見飽きたのではない。

男のぬらぬらした瞳には、ねっとりとした野心が輝いていた。淡墨桜、神代桜と同じ品種である江戸彼岸の桜木。特に珍しくもない種の樹木にとりつかれた者が、この男を含めずとも今まで何人いたことだろう。

変哲なき桜木の秘密を探ろうとする幾人もの人間を相手にしてきたが、今回の男はどうにもしつこかった。

どうしたものかと悩む前に、父の暴拳を悟った娘がそれを窘める。ようやく引き下がった男よりも娘は申し訳なさそうにしていた。

少しばかり苦笑を浮かべ、互いの苦勞を労う。

「それにしても、本に綺麗な華が咲く」

男の声に仰ぎ見れば、紅を抱く古木が風に枝を揺らす。

髪を押さえる娘の背を見つめ、私は幼い頃からの想像をしていた。桜に群がる人間の下。一辺の光も届かない真っ暗な地中に、力強く張り巡らされた幾つもの根。

それに混じり、幾人もの人間が腐敗し、白い骨となって根と一体化するように絡み合っている。

真実を知った娘はどのような反応をするだろうか。

私は薄く笑った。

人は飛べない（2000文字）

窓がある。

白い壁を切り取り、硝子の板をはめ込んだ箇所から曇り気味の空模様が窺える。

陽が照る様子はない。

ここは郊外にある病院の三階だ。目線よりも下に、人の手の入っていない雑木林が懸命に枝を伸ばしていた。

白一面に囲まれた中で唯一の色だった。

ベッドから下り、裸足のまま窓へ寄った。カーテンの白い布が両角の纏められている。私の世話をする誰かがカーテンを開けたのだろう。

久しぶりに外を見たせいかな曇り空に関わらず目が眩んだ。

ひんやりとした硝子に掌を押し付ける。

この窓には開けるための作りはない。透明な境界線が、私と空の間にはあった。

硝子の冷たさが接した掌を徐々に侵していく。小さな影が木々の隙間を跳ねている。

雀だろうか。目を凝らしても、私の目が上手く葉に隠れる生き物の姿を捉らえることはなかった。

「起きて大丈夫なんですか？」

僅かに驚いた様子の声。

重傷を負って四ヶ月。怪我はほぼ動いても問題ないまでに治っていた。

それでも今日までベッドに寝たきりになっていた病人を気遣う訪

問客は、荷物を足元に置くと早足に寄ってきた。
窓に反射する一連の動作を見守り、足を翻して窓に背中を合わせた。

「へーき」

体力がなくなって少し身体は気だるかったが、それは平氣の内に含まれると思っている。

訪問客はちらりと窓を見やり、その前でもたれる私を見て複雑そうな顔をする。

筋肉の衰えた足で歩く感覚を一步一步味わいながらベッドへ戻ると、訪問客はようやく表情を和らげた。

「その窓、開かないようになってるんだね」

「ええ、万が一また事故が起きれば一大事ですから」

「嘘つき」

切り返した言葉に、今度は困った顔が現れる。

にんまりと笑ってやると、困った顔は益々困った顔をして床に置いた荷物を取りに向かった。

「私も、ミツヒコさんも貴女のことを心配してました」

鞆の傍らにある紙袋から新しい着替えを取り出して、代わりにここ数日で汚れた寝着を丁寧に仕舞う。

少しぎこちなくて、服を畳む行為に慣れていない印象を受けた。

「困ったことがあれば、何時だっていいんです。私でも、ミツヒコさんでも。私達は貴女の味方なんですから、」

「火事になって逃げ場のない人ってさ、何すると思う?」

言葉を遮られ、訪問客はきょとんと私を眺めた。

何の話をしているのか飲み込めないのだろう。理解しようとする気持ちと不安が入り交じった顔をしていた。

「火事だよ火事。家事手伝いじゃなくて火災の方ね」

継ぎ足しヒントを与えてみても、訪問客はまだ飲み込めない様子だった。

「高層ビルとかき、上の方に住んでる人って逃げ遅れた時絶望的じゃない。煙が上ってきて、息が苦しくて火が見たことないくらい燃えててさ」

一呼吸置く。

「飛び降りちゃうんだって」

息を飲む音。

「死ぬつもりなんて全くなくて、地面が近く見えて、助かりたくて飛び降りるんだって」

私は訪問客 母を見据えた。

仕事ばかりで家に寄り付かないワーカーホリックな父と母。鍵っ子な私。

夕方帰る家はいつも真っ暗だった。

闇に沈んだテーブルの上の食卓はいつも空だった。

留守番電話が流す声は生身で聞く機会はなく、まるで他人のようだった。

喜びも悲しみも怒りも不安も、分かち合う人など私にはいなかった。

いつからか、意味のない、原因のわからない不安が付き纏うようになっていた。

マイナス思考とは違い、思考をすっ飛ばして感情が疼く。相談する相手もなく、私は戸惑った。

どうしてこんなに心が揺れるのか。

それからドミノ倒しのように不安は広がっていった。勢いのついたドミノは止まることを知らず、津波のような荒々しい感情で胸がつかえる。

吐き気になり、手足の振るえ、体温を急激に上げては下げた。

高熱に浮かされた時と似て頭はぐらつき、回転が鈍くなった。

電話が告げるメッセージ。

困ったことがあったら電話しなさい。

本当はその言葉に縋りたかった。縋りついて胸を掻き回す毒をあのまま叫びたかった。

けれど不安はそれを許さない。

もし拒絶されたら。縋り付いた手を振り払われたら、私はどうすればいいのだろう？

両親が帰ってくると聞いた時、私は恐ろしかったのだ。

「もう飛び降りるのは止めてください」

正面から向き合った母は泣いていた。

私の肩を押さえて、その場に留まらせようとしていた。

記憶の中よりも、ずっと歳を取った手だ。

母ごしに見る窓。それはやはり晴れてはいない。

病院の真つさらな白い壁紙と異なり、流れる雲は様々なものがごちゃごちゃと濁った色をしていた。

はつきりとはせず、ただただ白濁とした景色だ。

雑木林から飛び出した影。小鳥が二羽、どこを目指してか飛んでいく。黒い点が遠ざかって消えていった。

人は空を飛べない。

自力では重力に逆らえない。

道具を使って、漸く人は地上何千メートルの地面のない世界へ行ける。

それでも人は飛ぶのだ。

何かから逃げるために、何かを終わらせるために、何かから自由になるために。

生きたいとあかく人達のように。

人は飛べない（2000文字）（後書き）

書いてるうちに何だか暗くなった話

きつとお休みが少ないせいでしょうそうでしょう

獣の檻（5000文字）

春のさらさらとした柔らかな陽射しを受けて、その獣は緩やかに瞼を開けました。

獣が光に吊られ顔を上げると、黒い毛並みに薄く積もっていた砂がさらさらと零れ落ちます。

眼を細める獣に見えるのは、頑強な岩で出来た空間と風が運んできた白い砂、それに天井の穴を塞ぐ幾重にも重なった茨の蔓でありました。

そこは獣を囲う檻でありました。

獣は遙か昔にこの場所へ閉じ込められました。獣の持つ爪や牙は誰一人として傷つけたことはありませんでしたが、人々はこの黒い獣を恐れたのです。

人から遠く離れた地に追いやられ閉じ込められたまま、黒い獣の記憶はかつての人々に忘れ去られているのでした。

幾度と昇る陽と月を、獣は見上げて過ごしました。茨の隙間から降る雨や鳥のさえずりに耳を傾け、自由でない我が身を慰め眠りにつくのです。

夜暗に沿う月を眼窩へはめ込んだような、優しい金色の瞳を閉じた獣の意識は、唯一夢の中では自由になれるのでした。

夢の中で獣の姿は檻ではなく、故郷の森にありました。

獣が生まれ育った見渡す限りの広大な森は、川を抱き、岩を抱き、またそこに生きる全ての命を抱く万能の母のようでありました。

月の明かりの下、夜鳥が歌い、虫が鳴き、色とりどりの花がそよ風に踊る光景の美しさ。

苔むした地を蹴り、力強く躍動する獣の軀は毛並みに月光を宿して風を切り、新たな風を生みだしながら駆けるのです。

土の匂い。草の匂い。花の匂い。風の匂い。水の匂い。雨の匂い。獣の匂い。

よく知る匂いを肺一杯に吸い込みながら、胸の内に懐かしい気持ち膨らんでいくのを感じるのです。

木々が伸ばす枝の間を抜け、高く高く跳躍した獣は吠えました。

己の存在を他者へ示すように、空気を震動させ、腹の底から声を張り上げました。

そして目覚めた獣は、目覚めた瞬間すつ、と色褪せた夢を思い浮かべ気を落とすのです。

檻には獣が夢の中で嗅いだ土の匂いも草の匂いも、どの匂いも感じられないのでした。

故郷の生命を育む匂いを乗せた風は訪れず、荒涼とした風が吹くばかりです。

獣は孤独でした。

ある朝のことでした。

獣は己の眼を疑いました。

檻に閉じ込められて以来、獣は初めて人の姿を見たのです。

人間の小さな男の子のようでした。獣の瞳より濃い金色の髪をしていました。瞳は閉じてすやすやと穏やかな寝息が聞こえます。彼らの頭上では茨の群に穴が開いていました。

男の子はそこから落ちてきたのでしょうか。細かな砂が落下する彼の身体を受け止め、彼の怪我を防いだのです。

木漏れ日と砂と壁だけの空間で、獣は子供を見下ろしました。

しつとりと湿った鼻を近づけると、子供は甘い匂いがしました。

その匂いで、男の子がまだ母親と離れる年頃でない幼い子供なのだと獣は悟りました。

獣と寄り添うように眠る子供は粉砂糖のような砂を少し被って、獣の纏う毛皮を真つ白な五本の指でしっかりと握っています。

大層大事に育てられたのでしょうか。男の子の手に仕事の痕跡は見当たらず、ぷっくりとしていました。

服もつぎはぎなどが見当たらない綺麗なものです。

不思議でした。ここに男の子がいることも、男の子が自分にくっついていることも、獣には理解出来ません。

砂と同じように、風が運んできたんだろうか？

そう考えると、獣はきっとそうなのだろうと納得しました。ここへ自由に入れるのは、形のない風と水だけなのです。

男の子の頬の上、照らしていた木漏れ日が二度瞬きました。鳥の影が横切ったのでしょうか。

余程深く眠っているのか、男の子が起きる気配はありません。

獣はその日、檻の外を見上げませんでした。

「じじじじじ」

早朝、心細い声で起きた獣が見たのは不安で泣きじゃくる男の子

でした。

獣は男の子の青い瞳がとめどなく溢れる涙で濡れる様を眺め、どうすれば泣きやむのか分からず困りました。

子供のあやし方を獣は知りません。

『泣くな』

鼻先で男の子を突くと、男の子は勢いに負けて簡単に後ろに転びます。

力加減を間違えた獣は焦りました。男の子は尻餅をついたまま泣きやんで、きょとんとした顔で獣を見上げます。目がこれ以上なく落ちそうなくらい見開いています。水の膜が張った瞳がきらきら輝いていました。

「獣が生きてた！」

獣より先に起きた男の子は、ぴくりとも動かない獣が死んだものと思っていたのです。

死んでいるのかと思っていた獣が動いたのですから、男の子の驚いた叫び声は檻の中で反響し、木霊するのです。

落ち着いた男の子と獣はたくさん話をしました。

獣の故郷の森の話。

春にだけ出来る一面の花畑の話。

夏に蜂から巣を盗んだ話。

秋に棘のついた果物を頬張って大変な目にあつた話。

冬の間にだけ見られる白い世界。

兎を追い掛けている内に森の外へ出てしまった話。

男の子の住む港町の話。

大きな船に手を振ったら船員達が振り返してくれた話。

網でたくさんの魚を獲った話。

海の神様に感謝するお祭りに家族で参加した話。

町の得意料理の話。

お母さんと喧嘩して町から飛び出した話。

獣の話を男の子が聴き、自分の番が済むと男の子の話を獣が聴きます。

代わる代わる話をした獣は話すことで更に故郷の森を明確に思い出すのでした。

そして想像もつかない男の子の故郷の話に胸を踊らせました。

「お母さんは、まだ僕を怒っているかな？」

不安が滲み出たような色を含む声で男の子が問います。

残念なことに、獣は問いの答えを持っていませんでした。

男の子は檻の外を見上げていました。

その夜、獣の夢に故郷の森は現れませんでした。

獣の視界を明るくするのは星明かりではなく、道に飾った松明の火でありました。

夢の中の獣はお祭りにはしゃぐ男の子を背に乘せ、見たこともない港町を歩いているのでした。

それは素敵な夢でした。

何より獣が喜んだのは目が覚めても男の子の姿があることでした。

そんな日が二日ばかり過ぎました。

頑丈な獣と異なり、男の子の身体は徐々に弱ってきていました。

ふっくらと焼きたてのパンのようだった頬は大人のように細まっ

て、薔薇色だった顔色も薄暗くなっていました。

檻にあるのは砂と岩壁。男の子に必要な食べ物や飲み物はどこにもありません。

男の子は身体の渴きをごまかすように獣へ質問を重ねます。

「君は熊なの？」

『熊じゃない』

「熊じゃないなら、君は狼なの？」

『狼じゃない』

「熊でも狼でもないなら、君は猿なの？」

『猿じゃない』

男の子はそれ以上、森に住む牙と爪のある生き物を知りません。

「熊でも狼でも猿でもないなら、君は一体何なの？」

『獣は獣だ』

正直なところ、獣も自分が何なのか知らないのです。ただ熊でも狼でも、ましてや猿でもないことはわかっていました。

「怒られてもいい。お家へ帰りたいよ」

質問が途切れると、男の子は獣の毛に顔を埋めて泣きました。

どんなに喉が渴いていても、涙はぼろぼろ出ていきました。

獣は男の子が落ちて来て初めて檻の外を見上げました。

茨に開いた穴は獣の身体よりうんと小さなものでしたが、もしかしたら抜けられるかも知れないと獣は思いました。

男の子は可哀相な位痩せて、枯れた眼で泣いています。

もし男の子を連れてここから抜け出したら、男の子はどんなに喜んでくれるでしょう。どんなに獣に感謝するでしょう。

そして楽しそうに男の子の話した港の町は、どんなに素晴らしい場所でしょう。

きつと故郷の森の木陰に沈んだ静寂さよりも天の光に恵まれ、また天を映した海の光に恵まれた町なのでしょう。

町の得意料理だと言った魚料理を食べて、両親に見守られた男の子は元気になるに違いありません。

しかし獣は男の子を家に帰そうとは思いませんでした。

男の子を見下ろします。

男の子は獣が何を考えているのか知った様子もなく泣き続けていました。

獣の心は孤独で飢えていました。

四日も過ぎると男の子は何も話さなくなりました。

獣の身体に寄り掛かって座り、細腕を持ち上げ無意味に砂を弄りました。

冬の枝を思い出させる指の間から、さらさら、さらさらと砂が零れ落ちていきます。

軽い砂は地面に当たって舞い上がり、光を反射してきらきらしていました。

さらさら、さらさら。

流れる光の粉はまるで男の子の命そのもののようで、獣は砂から目を離せませんでした。

『死んだらどこへいくんだろうか？』

獣は問いました。

「わからない」

蚊の鳴くような声が獣の耳に届きます。

それでもここではないどこかへ行くことは、一人と一匹も知っていました。

五日目の朝のことです。

男の子は目を開けませんでした。

冷たくなった身体がありました。獣はもう男の子がここにはいないことを理解しました。抜け殻だけが獣と一緒に檻に残っているのです。

獣は悲しかったです。

男の子の上に積もった砂を払い、獣は男の子に鼻を寄せます。最初に嗅いだ甘い匂いはありません。

何分か、何時間か、何日か。何時までそうしていただでしょうか。獣は男の子から鼻を離し顔を上げました。

外に出よう。

獣はそう思いました。

上顎と下顎の間に男の子を挟み、傷つけないよう気を払いながら獣は高く高く跳躍しました。

夢の中、故郷を駆ける獣の姿とその姿は重なります。

バネのように力強く、宙を飛んだ獣は茨の蔓を簡単に突き抜け地上へ出ました。

遙か昔、人々が取り付けた鉄格子は長い年月に耐え切れず腐っていたのでした。

檻の外では青く澄んだ空が広がっていました。獣の脳裏に男の子の瞳が過ぎります。

陽は西に傾いて、東の空が暗くなっています。獣は茨の絨毯を踏み締め、ゆっくりと男の子の故郷があるであろう海の方角へ歩き始めました。

一人の男の子がいなくなって、平和な港町は大変な騒ぎでした。

男の子の両親は町中の人々に行方を尋ね、夜もろくろく眠れない日々を過ごしておりました。

最後に男の子を見かけたという老婆は、男の子が町から外へ出る道を歩いていたと証言しています。

もしも外に出て帰れなくなっているとしたら。そう考えると男の子のお母さんは、家出するきっかけになった喧嘩をした自分を責めるのです。

「……私さえ、あの子と喧嘩をしなきゃ良かったのよ」

悲嘆にくれる男の子のお母さんを、男の子のお父さんが肩を摩つ

て慰めます。

男の子がいなくなって五日間。両親が無事を祈らなかった日はありません。

じつとしていられない妻のために、両親が町を歩いていると町の入口がにわかにはわめきました。

男の子が出て行ったと言われる、海と反対方向の入口です。

両親は男の子が帰ってきたのかも知れないと思い、急いで入口へ駆けていきました。

途中、男の子が帰ってきたにしては町の住民の様子がおかしいと気付いたのはお父さんの方でした。

入口をぐるりと囲むように出来た人垣を死に物狂いで掻き分けて行くお母さんの後を、戸惑いながらお父さんはついていきます。

人々の熱気と違和感と期待が混じりあってお父さんの足は早くなり、いつの間にか前にいたお母さんを追い抜いて走っていました。

嫌な予感は当たっていました。

町の入口。開いた門の中心に巨大な獣が幽玄と佇んでいました。

熊でも狼でもない、子供だけでなく大人でも見たことのない獣は、闇に溶ける漆黒の毛皮の隙間から金色の眼を覗かせています。

猛禽類が持つ、油に似たぎらぎらした妖しい輝きを宿す眼に、人々は動けずにいました。獣は石像と化した人の波に一瞥をくれると、顎にくわえていた何かを放りました。

人の目が宙に弧を描く何かに集中します。

最初、獣の眼のような金色が見えました。

続いて青白いものが見えました。

どさり、と石畳に落ちたものはその場にいる全員が知っているものでした。

全員が五日前から探していたものでした。

悲鳴が鼓膜を打ちます。

人垣の真ん中に落ちたそれに、男の子のお母さんが駆け寄ります。

お父さんは、お母さんが縋り付くそれが自分の息子であるとうまくわかりました。

獣と眼が合います。

鋭さのなくなった獣の眼はまるで夜空に浮かぶ月のようです。不思議なことに色彩だけでなく、柔らかく人々の眠りを見守る月の温かみがありました。

自分から視線を外せずじっと合わせていると、ふいに月が消えま

した。

重圧がなくなり、人々が動き出します。お父さんは男の子の傍らで膝を折り、痩せた頬に手を添えます。

男の子は事切れていました。

それから獣と男の子の帰った港町はどうなったのか。それは誰にもわかりません。

獣は故郷の森を駆けているのでしょうか。

男の子は両親と家へ帰れたのでしょうか。

その先の物語を誰も知らないのです。

獣の檻（5000文字）（後書き）

ここまで読んでくれた方ありがとうございます。
そしてごめんなさい。

例によって途中からモチベーションが切れましたorz

ある二人の会話（500文字）

ある町の入口で。

「俺思っただけどさ」

「何を？」

「俺達が死ぬ思いでたどり着いた町で平然と暮らしてる人達って、別に俺達を守る必要ないんじゃないかって」

「特に頑丈な塀をこしらえてるわけでもない村でも日常生活を営んでる人達もいるわね」

「寧ろそいつらが団結して戦った方が問題解決も早くね？」

「自分の存在意義を否定しちゃダメだって」

「しかも何故俺達の方かう先々でトラブルが起きるんだ？」

「隠れ職業スキルよ」

「何それこわい」

「どんまい」

「村長や町長や国王共、面倒事ばかりこっちに回してきやがって、選択肢に『はい』と『いいえ』があるけど結局『はい』を選ばせられるし」

「職業柄しかたないわよ、諦めなさい」

「自分で選んだ職じゃないのに……」

「はいはい、愚痴ってないで。新しい町に着いたんだから装備を揃えましょ。お金はだいぶ貯まったでしょ？」

「装備をただでくれればいいのになあ、職業柄」

「その分民家や城から遠慮なしにたんまりどугを盗んでるでしょ。この前どугを漁った城の国王なんてこめかみが痙攣してたわよ。

……お店はあつちかしら？ 早く行こ」

「ちょ、そっちは何となく危険な雰囲気がつ……」

今日も勇者と僧侶は元気です。

ある二人の拳動（500文字）

ある町の入口で。

低い塀に囲まれた町の前、一組の男女が佇んでいる。

男は鉄製の片手剣を腰から下げ、同じく鉄製の鎧を身に纏っている。

女は櫛を削って作った杖を手に持ち、革製の簡易防具の上からローブを羽織り、頭には羽のついた帽子を被っていた。

二人共男女というより、十代後半の少年少女といった感じた。少年の黒髪は乱れていて鎧には泥がこびりついている。少女のローブも埃っぽかった。

何故か彼等はボロボロだった。

少年は身綺麗な格好で町を横行している一般人を見て何やら呟く。肩をすくめて少女が応じ、少年は軽くうなだれた。

慰めるように少女が丸まった背中を叩き、グツと拳を握る。少年は怯えたようにその場から飛びのいた。

何時までも町の入口で雑談を続ける二人を町の住民が不思議そうに眺めている。

二人はそんな視線をものともせず、落ち込んだり愚痴ったりする少年を少女が慣れた様子で窘めていた。

口を動かしながら少女が町へ入る。

そして一見して見るからに騒がしく怪しい雰囲気を醸し出す道を避けるどころか、何故か自ら突っ込んでいった。

少女に手を掴まれた少年も否応なしに道連れにされる事となる。
引き摺られて歩く少年が勇者と気付く者はない。

ある二人の挙動（500文字）（後書き）

ようやく合計10000字になりました。

ばぁーい／（>O<）／

なんだよ、またかよ（800文字）

テレビをつける。

すると一昨日からずっと報道している虐待事件がまた流れていた。

「なんだよ、またかよ」

顔をしかめ、リモコンでチャンネルを変える。

すると今度は虐めを苦に自殺した中学生について、コメンテーターがいつかどこかで聞いたような台詞を繰り返している。

「なんだよ、またかよ」

もういい、うんざりだ。

テレビを消した。

ニュースの他にはお笑い番組かうんちくかクイズ番組しかやらない。

「お父さん、買ってきたよ」

床に横たわったところで煙草を買いにいかせた息子が帰ってきた。

「おせーんだよ」

差し出された煙草と釣りをもぎ取り痩せっぱっちの身体を蹴り飛ばす。

「おい！ 金が少ねえじゃねえか！」

釣りを数えるといつもより少なかった。

怒鳴り付けると息子は汚い顔で震え上がった。

「煙草が高くなったんだよ」

「嘘をつくな。お前が勝手に使ったんだろっ！」

躰のために殴り付ける。

今の内に教えておかないと、ろくな人間に育たないからだ。
今でも十分ろくでなしなんだから叩き直してやる気で殴る。

息子が泣きながら悲鳴を上げる。

大袈裟なやつだ。

ますます気に食わない。

「やめてっ」

「親に口答えすんじゃない！」

倒れた息子の背を蹴ろうとして、ドアが激しく叩かれる。

舌打ちして玄関の鍵を開けると警察が立っていた。

一気に熱が冷める。

警察から虐待だ何だとよく分からない話をされる。躰の一環だと主張したが、息子は俺から隔離して保護すると言われた。

スムーズにやってきた警察は、元から俺に目をつけていたらしく、今日の通報がなくても近い内に息子を保護する予定だったと聞かされた。

「なんだよ……」

続く言葉が見つからない。
俺が何か悪いことしたか？
寝てただけじゃねえか。
俺は悪くない。
俺は悪くない。
俺は……

『本日未明。××県××市内で虐待事件が発生。××容疑者は九歳になる息子へ痣になるほどの折檻を執拗に繰り返したとされ……』

テレビの前で、誰かが呟く。

「なんだよ、またかよ」

暗色遊泳（500文字）

真っ暗闇を漂っていた。

あたしから伸びる一本の命綱。そこから届けられる酸素と栄養分が、あたしの生命を繋いでいる。

無重力で一定の心音が鼓膜を伝う。

何もない場所で身体を出来るだけ小さく丸めて、手をぎゅっと握った。

そうすると自分がちゃんとここにいるんだと実感できた。

それでも不安になると、あたしは命綱を触った。細長い紐の感触を撫でて心から安心を得るのだ。

それはいきなりだった。

暗闇で揺らいでいると、とてつもない力で身体を引き寄せられる感覚が襲った。

抵抗すらままならない。

身体は何度も捻られ、全身に圧力を感じた。

苦痛を与えられても、庇うことすら出来ない。

そしてとうとう暗闇から投げ出された。

重い。重い。

身体の自由が奪われた。

苦しい。苦しい。

酸素を求めて必死にもがく。

悲しい。悲しい。

永遠に続くと思っていた暗闇と切り離された喪失感。

命綱をたぐって元の場所へ戻ろうと、紐の感触を手に掴もうとして空振る。

紐はもう、どこにも繋がっていなかった。

余りに恐ろしくて、あたしは悲鳴を上げた。

声を絞って泣いた。

全身から、ありのままの気持ちを吐き出した。

あたしのすぐ近くで何かが動く。

「おめでとつございます。元気な女の子ですよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4908k/>

瀬踏み小説

2011年10月5日19時46分発行